第60回日本ＰＴＡ全国研究大会 京都大会

いのち こころ ゆめ ～伝えよう つなげよう 育もう～

去る8月24日（金）、8月25日（土）の2日間に渡り、第60回日本ＰＴＡ全国研究大会京都大会が開催された。震災の長き復興への思いを含め、子どもたちのこころに今、大人として何を伝えていくべきなのか、日本の伝統文化を受け継ぎ守り続ける古都京都の地で、日本人の持つ思いやりや、気遣いを見直しながら、学べた大会になった。

全体会　開会式

第1日目 分科会

2つの特別分科会を含め、10分科会に別れて行われた分科会では、教育のプロのみならず、スポーツの世界や華道・書道・狂言師、料理人、キャスター、と幅広い分野から講演者をお迎えし、それぞれの立場や体験から、家庭、子育て、地域とのつながりなどについて、講演をしていただいた。そして各分科会の研究課題について、会員らの発表がされた。全体で約8200名の参加者が、自分の子育てや繋がりの在り方を改めて見直せる時間を過ごせたように思う。（3・4・5面参照）

第2日目 全体会

開会式では、新会長の挨拶の中で、直に会員へ会長の熱いメッセージが伝えられ、祝辞の中では文部科学大臣より、今の子どもたちを取り巻く多種に渡る問題点について、様々な思いが伝えられた。

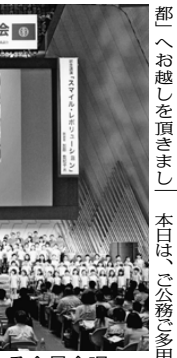
記念講演では加藤登紀子さんによる「スマイル・レボリューション」と題した、歌を交えながらの心に響くお話を伺うことができた。

記念講演後の「がんばろう日本！がんばろうＰＴＡ！」では京都の子どもたち500名と参加者全員合唱を行い、復興の支援を引き続き続けていくことを誓い、絆を深めることが出来たと思う。（1・2面参照）

京都の子どもたちと参加者による全員合唱

会長あいさつ

絆が生み出す可能性 子どもたちに生きる力を


武田岳彦会長

皆様、おはようございます。ようこそ、日本の文化と伝統が息づく古都「京都」へお越しを頂きました。大会開会にあたり、主催者を代表し、ご挨拶を申し上げます。

本日は、ご公務で多用の中、文部科学大臣平野博文様・京都府知事山田敬二様・京都市長門川大作様をはじめとする多くのご来賓の皆様にご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

そして、全国より、8000名をこえるＰＴＡ会員の皆様から、ご参加をいただき、「第60回日本ＰＴＡ全国研究大会京都大会」を、このように盛大に開催できますことは、大変ありがたく心から御礼を申し上げます。

また、会員の皆様には、日頃より日本ＰＴＡに対し、深いご理解・ご協力をいただいておりますことに、改めて御礼を申し上げます。

本大会は、「いのち こころ ゆめ ～伝えよう つなげよう 育もう～」をスローガンに掲げ、開催いたしました。年に一度、全国各地から、参加者が集う大会だからこそ、感じることができることがあります。それは、ＰＴＡの持つ無限のエネルギーです。

同じ願いのもとに活動している仲間が、こんなにもたくさんいるのだということを、是非、肌で感じてください。

ＰＴＡ活動は、地道で、すぐに成果があらわれないものが多く、活動の意義を認識しにくい面があるかもしれません。しかし、ＰＴＡ活動を通して、子どもたちが笑顔を見せてくれたなら、それは、何もしない時よりも、少しだけ笑顔の多い明るい未来を、皆さんの努力で、築いたといえると思います。しかも、全国各地で、これだけたくさんの方々が、子どもたちのために活動をしてくれるのですから、子どもたちの健全育成に対する貢献度は、はかりしれないほど大きなものだと考えています。それはまさに誇るべき活動です。

この大会を通して、全国のＰＴＡの仲間の存在と、その絆が生み出す可能性の大きさを、五感で感じていただけたら幸いです。

東日本大震災の発生から、1年5ヶ月が過ぎました。未曾有の災害に見舞われた究極の状況で、多くの人が見せてくれた勇気や思いやりのある行動、その後の復興に取り組む力強い姿は、まさに生きる力を子どもたちに示してくれるものだと感じています。日本には、生きる力を伝える教育力があります。道徳心や礼節、規範意識などの生きる力に通じる心の教育は、まずは、家庭で親から子へ教えられ、そして地域や学校で実践されて深められていくものだと考えています。本研究大会が、子どもたちの生きる力を養う一助になれば幸いです。

さて、昨年は、日本ＰＴＡで呼びかけた東日本大震災への支援活動に、暖かいご協力をいただきありがとうございました。被災地の子どもたちは、いまだ、従前の学びの環境を取り戻すには程遠い状況におかれています。私たち日本ＰＴＡは、被災地の子どもたちのことを、絶対に忘れないという決意のもとに、心のきずな61キャンペーンという継続支援に向けた活動を展開してまいります。この場をお借りして、昨年同様、全国のＰＴＡの皆様方の、ご理解、ご協力を心からお願いを申し上げます。

結びに、本大会開催にあたりご尽力頂きました、日本ＰＴＡ近畿ブロック協議会、京都府ＰＴＡ協議会、京都市ＰＴＡ連絡協議会の皆様、そして地元関係各位に、心から感謝を申し上げ、私の挨拶と致します。

ありがとうございました。

大会宣言

私たちは、「いのち こころ ゆめ ～伝えよう つなげよう 育もう～」（Ｐ（ピー）— tach（タッチ））というスローガンのもと、悠久の歴史と豊かな自然に彩られた日本の心のふるさと京都に集い、第60回日本ＰＴＡ全国研究大会京都大会を開催しました。

平成23年３月の東日本大震災は、私たちに深い悲しみと厳しい試練をもたらしました。「心のきずな61キャンペーン」の推進は、被災地の子どもたちの教育環境を一日も早く回復させるための活動です。

また、子どもが犠牲となる虐待や、いじめ問題など、子どもを取り巻く環境が依然として厳しい状況にあることは看過できません。

私たちは、子どもが安心して暮らせる安全な社会の構築に向け、全国のＰＴＡが“こころ”でつながり、社会の宝である「子どもたち」を真ん中に、地域や社会全体で見守り育むことの大切さを再確認して取組を進めてきたところです。

この研究大会では、子どもたちの健やかな育ちの環境づくりに向け、「大人として今何ができるのか」ということを共に考え、ＰＴＡとして具体的に行動を起こすことの大切さを学ぶことができました。

私たちＰＴＡは、いつの時代にあっても、どんな困難な状況であっても、子どもたちが“ゆめと希望”を抱き、かけがえのない“いのち”が輝く社会を目指す責務があります。

今こそ、親と先生が手をつなぎ、地域社会全体で子どもを抱きしめるという熱い想いを共有し、次のとおり決議します。

決議

一、子どもの“いのち”を育むＰＴＡ活動を推進します。
一、親（Ｐarent）と先生（Ｔeacher）が手をつなぎ（Ａssociation）地域社会全体（Ｃommunity）で子どもを抱きしめる（Ｈug）ＰＴＡ活動を推進します。
一、親子の会話で“こころ”が触れ合う家庭をつくるＰＴＡ活動を推進します。
一、自立と自律のできる子どもを育むＰＴＡ活動を推進します。
一、楽しく、ためになり、元気の出るＰＴＡ活動を推進します。

平成24年８月25日
第60回日本ＰＴＡ全国研究大会京都大会

日本ＰＴＡ

発行所
〒107-0052
東京都港区赤坂7丁目5番38号
社団法人
日本PTA全国協議会
発行人　武田岳彦
電話 03(5545)7151
FAX. 03(5545)7152
ホームページアドレス
http://www.nippon-pta.or.jp/

綱領

本会は教育を本旨とする民主的団体であり、不偏不党・自主独立の性格を堅持し、ＰＴＡの健全な発展の維持、並びに青少年の幸福な成長を図ることを目的とする。

主な内容

1面
●全国研究大会 京都大会
2面
●全体会
3面
●分科会(1～4)
4面
●分科会(5～8)
5面
●特別第1分科会
●特別第2分科会
6面
●広報紙コンクール
●県P自慢
7面
●文部科学省のページ
8面
●各ブロック大会のお知らせ
●PTA会長日記
●学校の窓から

本紙は各校ＰＴＡに四部、内訳として「校長・教頭用」、「ＰＴＡ会長・役員用」、「広報委員会用」、「事務局用」を目安にしています。

きざし

▼今年の夏は、オリンピックに沸いた年であった。日本の選手が活躍するたびに、一喜一憂していた。どの選手も結果にかかわらず、精一杯頑張っていた姿に敬意を表したい。その影響か、今までどちらかといえば、目立たなかった種目が今、脚光を浴びつつある。フェンシング、アーチェリー等、今、スポーツショップでの売り上げが急増しているようだ。これ欲しくない。日本人の長所であり短所である、盛り上がりが大きいほど、あっという間に熱が冷めてしまう。「継続は力なり」という名言があるが、なかなか一つのことを続けて努力していくことが難しいようである。このことは、普段の学校生活においても、家庭生活においても言えることだと思う。勉強は、毎日やることは誰しもわかってはいるが、なかなか継続できない。親も、わが子を見てれこれ子どもたちに注文しているが、親がしなければならないこともたくさんあるのではないか。それを、毎日継続してやっているのか。子どもたちはちゃんと見ているはずである。子どもたちは、親の姿、親の背中を見て生きているはずである。したがって、親がまず範を示すことが、何より大切ではないかと思う。（自戒を込めて）▼いよいよ二学期が始まった。始業式での子どもたちが、夏休み部活動で、真っ黒になった姿を見ると頑張ったんだなと実感する。そして、一声「よく頑張ったな」と声を掛けると、「ありがとうございます」とか「二学期も頑張ります」という言葉が返ってくると、教師冥利に尽きる。辛く、苦しかった練習や試合で培った力を、日常の生活に活かせるよう、我々教師も子どもたちを支援していくことが、子どもたちがさらに成長していく一歩だと確信する。

第60回日本ＰＴＡ全国研究大会 京都大会

祝辞

文部科学大臣 平野博文氏

はじめに、去る6月13日・14日の大雨で大きな被害を受けられた近畿圏の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、本日、第60回日本ＰＴＡ全国研究大会が、ここ京都府において、このように盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

本日は、こうやって皆様と相対してお話しさせていただくという貴重な機会をいただきましたので、私が、最近、特に思うところの話も交えながらご挨拶をさせていただければと思います。

東日本大震災からすでに1年5か月以上が経過しました。

この間、皆様には、子どもたちのため多大なる御尽力をいただきましたことに、まずもって、心より感謝を申し上げます。私自身、文部科学大臣を拝命して以来、機会あるごとに被災地を訪問いたしました。

厳しい状況の中でも逆境に負けずに取り組む子どもの姿、生まれ故郷で一所懸命に生き抜こうとする姿に、心を打たれました。また、その子どもの直向きな姿から発せられるエネルギーに、むしろ元気や夢を失いかけていた大人達が勇気づけられている光景もありました。まさに、子どもたちは社会の光であることを改めて確信しました。未来を担う世代の育成こそ、日本復興のための大きな方策であり、これに最大限の努力を傾けなくてはならないとの思いを一層強くしたところです。

また、震災を通じて、私たちは、人と人とのつながり、地域の絆の大切さを改めて痛感することとなりました。特に、これからの防災教育は、災害時の防災拠点となる学校と地域の連携により進められることで、大きな成果を得られることが再認識されています。それ以外にも、学校と地域との日頃からの協力関係は、日常生活における事件・事故から子どもを守る上でも、また、子どもたちの学びをより生きた学びとしても、不可欠なものであると考えています。このため、学校・家庭・地域の連携協力を、今後の教育政策のキーワードとし、各種施策の充実に努めてまいります。

他方、全国に目を向けると、今、いじめ、暴力行為、自殺などの問題や、登下校中の交通事故など、大きな社会問題になっており、皆さんも心を痛めていらっしゃるものと思います。児童生徒が自ら命を断ち、その背景にいじめの問題があるという痛ましい事案が発生したことを大変遺憾に思っております。

児童生徒の自殺につながるような深刻ないじめの存在は、一種の社会病理であると私は認識しております。いじめは決して許されないことですが、どの学校でもどの子どもにも起こりうるものであり、その兆候をいち早く把握し、迅速に対応しなければなりません。

今回の事案を受けて文部科学省としては、私からいじめの解消に向けて関係者が一丸となって取り組むよう全国にメッセージを発信するとともに、いじめの早期発見・早期対応の重要性を再確認するために緊急調査を実施しております。また、省内に「子ども安全対策支援室」を設置し、近日中に、いじめの問題対策のための「総合的な取組方針」を策定すべく検討を行っております。いつまでに、どのようなことに取り組むのかを明確にすることで、今後も文部科学省が先頭に立ち、「命より尊いものはない」という基本姿勢を貫きつつ、子どもの命を守るため、「いじめの問題」への積極的・集中的な取組を進めてまいりたいと考えております。

また、この春、登下校中の児童等の列に車が突入し死傷者が出る痛ましい事故が相次いで発生いたしました。子どもの生命は、大人達の責任で守らなければなりません。このため、文部科学省としても、警察庁、国土交通省とともに具体的な対応策について、鋭意検討を進めているところであり、具体的な対策について来年度の概算要求に反映したいと考えております。

いずれにいたしましても、子どもの安全を確実にするためには、学校だけで取り組むことには自ずと限界があります。ＰＴＡの皆様の協力もいただきながら、学校、教育委員会、地域、国などの関係者がそれぞれの役割を確実に果たし、また、必要に応じて補完し合いながら進めていくことが必要だと考えています。

さらに、教員が教育委員会の許可無く皆様方であるＰＴＡ等を始めとした学校関係団体が主催する補習等の活動において報酬を受けていた事案や、学校関係団体からなされた寄付等に関し法令上の疑義を生じさせる事案等が指摘されており、5月9日に教育委員会に対して通知を発出したところです。教育委員会の問題ではありますが、長い慣例・慣行があったとしても、社会通念上、許されないことは、今の時代は認められません。ＰＴＡにおかれましても、会費の執行については、しっかりとした対応をお願いいたします。

東日本大震災によって多くの尊い命が失われてしまったことは、とても無念です。悔やんでも悔やみきれません。しかし一方、この大災害から学んだことについて、これを次の世に伝えることも今を生きる我々にとっての大きな責務でもあります。日常にあっては、あまりに当たり前のことで忘れがちな「命」について、改めてしっかりと向き合い、そのことについて話し合う必要があるのではないか思っています。先日も、震災により大切な娘さんを亡くされた方とお話しさせていただく機会がありました。その方は、『今我々生き残った方は、命の話をしなければならない。あの日まで確かに輝いていた命。行ってらっしゃいと笑顔で送り出された命、黒い波にのまれていった命、救えたかもしれない命の話を』とお話になっていました。本当にそのとおりだと思います。毎日、学校には、ランドセルを担いだ「命」が登校してきます。この「命」と真剣勝負で接し、そして帰りを待っている保護者の元に確実に帰すことが、学校の使命であります。学校や教育関係者はこのことを改めて肝に銘じながら、自らの職務を遂行すべきであります。他方、子どもたち自身の「命」について、しっかりと向き合い、話し合うことで、子どもは、自らの「命」の大切さを知り、そして他の「命」の大切さを学びます。このような地道な取組により、自殺が絶対にしてはいけないこと、いじめや暴力も絶対にしてはいけないことに気づかせることになるのではないでしょうか。いじめは社会病理です。このような「命」との向き合いについては、学校だけではなく、社会全体の取組や運動が必要であり、どのような働きかけがいいのかと頭を悩ましています。子どもの安心・安全の確保について、皆様と手を携えて真剣に取り組みたいと思っています。

是非、力をお貸しください。

さて、これまで、子どもの「命」の話を中心にお話をさせていただきました。ただ、言うまでもなく、その「命」を輝かせるのは、愛情であり、教育であると考えています。子どもたちが次の世代で、輝きながら自らの夢を実現できるようにするため、特に、学校教育について、社会の変化に適合しつつ、その充実を図ることが必要であります。

外国語教育の充実などを目指す新学習指導要領が、昨年度に小学校で、本年度には中学校において全面実施となりました。御承知のとおり、全ての子どもたちに、変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」、更には「生き抜く力」を育むことを目指し、改訂されたものです。今後とも、子どもたちの「生きる力」「生き抜く力」の育成に向け、一層効果的な取り組みが展開できますよう努めてまいります。

政権交代後、教育改革に関しては、これまで、第一段階として、家計が負担する教育費の軽減、第二段階として、教員の質と数の充実等の教育環境・条件の整備に取り組んで参りました。今後も改革の手を緩めることなく、これらの取り組みとともに、第三段階として、地方教育行政や学校のガバナンス改革、大学改革等に本格的に取り組んでまいります。特に初等中等教育については、地域の主体性、創意工夫が生かされる教育行政体制、すなわち「地域とともにある学校づくり」の確立に向けたシステム改革について検討を進めているところです。学校、家庭、地域の信頼関係をしっかりと築き上げ、三者が一体となって「地域とともにある学校づくり」を進めてまいる所存です。

文部科学省は、教育、文化、スポーツ、科学技術など、幅広い分野を担当しております。これらの分野はいずれも次の世代を担う先行投資となるものであります。我が国の未来のためにも、しっかりと取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

結びに、本日御出席の皆様方には、今後ともＰＴＡ活動のリーダーとして、また学校教育の良き理解者として、子どもたちの健全な育成のためにお力添えいただき、各都道府県等で創意工夫に満ちたＰＴＡ活動を進められるよう、改めてお願い申し上げるとともに、日本ＰＴＡ全国協議会のますますの御発展と、皆様方の一層の御活躍を御祈念申し上げ、私の挨拶といたします。

記念講演

「スマイル・レボリューション」

加藤　登紀子氏

歌手、女優、そして今は祖母としての自分を見つめ、故郷や自然に思いを馳せながら、歌を交えた心に響く講演になった。舞台に現れた加藤さんは、まず私たちにも馴染みの深い「百万本のバラ」を歌い、心に秘めた情熱を感じさせてくれた。

東日本大震災直後、自分に何が出来るのかを考え、被災地に赴き震災の爪痕の中で感じた憤りや悲しみ、苦しみの中の人々の他者を思いやる心や、優しさを、深く受け止め、歌手として歌にして伝えていくという思いにかられ、作った曲「今どこにいますか」、子どもの気持ちになって作った曲「青いこいのぼりと白いカーネーション」などを聴かせながらのお話となった。

会場は、その歌に心を揺さぶられたかのように、聴き入り、たくさんの方が涙を拭う姿が目についた。講演者の思いが、私たち聴衆に痛いほどに伝わる、まさに心の繋がる講演会になったように思う。

講演の内容は、ご自分の生い立ちからふるさとへの思い、震災支援のため訪れた東北での出会い、親が子に望む思いと噛み合わない子どもの心、太陽のように暖かく子どもたちを見守ってほしいという私たちへのメッセージなどなど、この紙面ではとても伝えきれないお話の数々だった。

「スマイル・レボリューション」…子どもたちが置かれている今の日本の社会（大人たち）の在り方、厳しさの中で、子どもたちの心の窓を開けさせてあげるために、私たち大人が微笑むことで、一歩を踏み出す力を与えたい、…そんな思いを、子どもたちの一番身近にいる私たち親へ、伝えたいという、講演者の強い思いを受け取ることができた気がする。

どうかこの講演を聴くことのできなかった皆さんも、どこかで彼女の歌を通して、その思いに触れていただけたらと思う。

加藤さんは、今後も歌や講演会、また本の執筆などの中で、「スマイル・レボリューション」を伝えていく活動を続けていかれる。

分科会報告

第１分科会～第４分科会

第１分科会　組織・運営

絆
～見直そう　親子の絆　親同士の絆～

第1分科会「組織・運営」は「絆～見直そう　親子の絆　親同士の絆～」をテーマに、実践発表、パネルディスカッションが展開され、コーディネーターの杉本厚夫氏を中心に、体験談などを織り交ぜながらの進行になりました。これからのＰＴＡは、私たちの意識の持ち方が重要であること、先生と子ども、親と子の縦関係と友達同士の横関係だけではない、地域ぐるみで子どもたちを包み込むことが提案されました。

基調講演　尾木直樹氏

アトラクションは、六嶋由美子さんのひとりものがたり「源氏物語～宇治十帖～」で幕が開け、十二単を着付けていき、源氏物語を語る姿は、参加者を、時空を越えた幻想的な夢の世界へといざないました。また、午後のアトラクションには、宇治市立南宇治中学校中国文化拳術部が登場、剣や槍などを使った一糸乱れぬ「中国武術演武」に、参加者から大きな拍手が巻き起こりました。

教育評論家の「尾木ママ」こと尾木直樹氏の基調講演は、「いじめは犯罪」の持論をふまえ、ユーモアを織り交ぜながら、いのちを守るための、学校と共同参画のＰＴＡ活動の大切さを展望されました。

また、宇治市連合育友会が「心のきずな61キャンペーン」とともに、京都府南部豪雨災害にあった子どもたちへの義援金活動をしました。被災した子どもたちが少しでも元気になれるように役立てさせていただきます。ご協力いただきました皆さまには心より御礼申し上げます。

ひとりものがたり
「源氏物語～宇治十帖～」

第２分科会　家庭教育

おうちは私のばんそうこう

基調講演　増岡弘氏

眩しいほどの青空の下、早朝よりスタッフ総勢４００名が集合し、第2分科会を開催しました。心配していた受付での混雑もなく、先ずはオープニングとして、全国からお越しになられた方々を吹奏楽の音楽でお迎えしました。

開会式の後、待ちに待った基調講演。サザエさんのマスオさん役で有名な声優の増岡弘さんにご講演いただき、第2分科会のテーマ「家庭教育」である、家族の大切さ、言葉の大切さを改めて見つめ直すことができました。時折、マスオさんやジャムおじさんが登場し、とても和やかで家庭のような温かい空間で、お話を聴けました。

さあ、お昼はこだわり抜いたお弁当。評判も良く、みなさん満足気な様子でした。

お昼の部は、少林寺演武、ヒップホップダンスの披露でスタート。子どもたちのはつらつとした演技がとても印象的でした。続いて実践発表。府内3校からそれぞれの親のための応援塾のお話をいただき、子どもたちを癒すばんそうこうの役割をするのは家庭であることを確認しました。

そして最後は、日Ｐ初の取り組みとなる参加型の小分科会。6つの小分科会がどこも笑顔で溢れていて、初顔合わせとは思えないくらい、語り合っている姿が素晴らしかったです。きっと、この発信が全国に種をまき、新しいＰＴＡ活動を芽生えさせてくれることでしょう！

エンディングは参加者全員による「ビリーブ」の大合唱。子どもたちと共に歌い、涙ぐまれている方もいらっしゃいました。そして本当の最後、全員でＰタッチをして、思いを一つにし、分科会の幕を閉じました。

「ＢＥＬＩＥＶＥ（ビリーブ）」の大合唱

第３分科会　学校教育

学校教育の充実と発展にむけて
～学校運営協議会（コミュニティースクール）の役割～

第3分科会は、四条傘鉾保存会による、くじ改め・傘囃子に合わせた棒振り踊りのアトラクションで幕をあけました。

基調講演　金子郁容氏

講師にお迎えした慶應義塾大学教授の金子郁容氏による『コミュニティースクールとは何か』と題しての基調講演。「いい学校いい地域をつくる」ためのツールの一つがコミュニティスクールである。夜早く寝て、朝ご飯を食べて、ちゃんと勉強する人が良い成績になるわけではなく、個人の力も大事だが、いいコミュニティを作ること、地域が子どもたちを支えることが大事であるという講演でした。

パネルディスカッションは、「夢と希望いっぱいの学校運営協議会」と題して、金子郁容氏がコーディネーターを務め、パネリストには大橋良弘氏・富田千果子氏・柳川眞由美氏・奈良哲氏・清水康一氏を迎え、各々の経緯等を交えた学校運営協議会設立時の苦労や思いなど、熱いディスカッションが行なわれました。

実践発表では、御所南小学校・山崎伊佐緒氏「学校運営協議会の活動～よき町衆を育てよう～」、藤城小学校・廣澤好信氏「好きです藤城！ひろげようふれあい」、伏見南浜小学校・樋口善則氏、白石幸太郎氏「新しい絆～地域・先生・保護者～」の、3校の特長ある活動が紹介されました。

私たちＰＴＡが担うべきは、個人の力やがんばりは重要だが、もっとコミュニティの力を高めること、ソーシャルキャピタルの高い地域を作ることが必要ではないか、と考えさせられた第3分科会となりました。

第3分科会のために第57回みやぎ大会・第58回ちぼ大会・第59回ひろしま大会の各実行委員長、実行委員が駆けつけ、この繋がりが、次期開催地みえ大会に繋がっていくのも、この大会の醍醐味ではないでしょうか。

第４分科会　広報活動

姿の見えない伝達の闇
～人として、教育をみつめる～

第4分科会は、「広報」のテーマで開催をした訳でありますが、当初よりこのテーマについての議論を重ねて参りました。単に、ＰＴＡ紙のことを話すだけではおもしろくないのではないか？広報だからこそ、一方通行ではなく、人と人の関係を大切にしなければいけないのではないか？ということであります。

分科会では、開会行事、基調講演と、「全体研修会」の時間帯を変えさせていただきました。これは、分科会に参加された皆様に、ほんの少しでも触れ合っていただく機会を提供し、本物の広報を体感していただくことが目的でありましたが、コーディネーターの佛教大学原清治教授の卓越した手法のおかげで、参加者全員がパネラーになる！という前代未聞の研修会を成功することができました。

感謝申し上げます。

一日全体を通して、会場の雰囲気が大変よく、朝の受付時には難しい顔をしておられた参加者が、帰りがけには笑顔で手を振っておられた参加者が、帰りいただけたのは、私たちにとって何よりの成功であったと感じております。

今後の日Ｐ大会でもそれぞれのテーマや地域性を考え、様々な手法にて、全国研究大会が、全国大会たる所以をもって開催されていくことを望むと同時に、今後益々のＰＴＡの発展を祈念しております。3年弱の間、お世話になりました皆々様に心から感謝申し上げ、お礼と致します。ありがとうございました。

全体研修会

分科会報告

第５分科会～第８分科会

第５分科会

地域連携

一人ひとりの子どもが光り輝く地域を目指して

～今こそ校種・地域を越えてみんなでつながろう～

基調講演
茂山七五三氏

第5分科会では、研究テーマを『一人ひとりの子どもが光り輝く地域を目指して』とし、地域と私たちPTAがどのように連携し、関わっていくかを考えました。

基調講演では、魅力ある人、暖かみのある人、そんな人と人の日々の繋がりがいつしか子どもたちを育んでいく、そして受け継がれていく事を学びました。その為にも私たち保護者は、我が子と関わりのある子どもたちはもちろんの事、地域に共に学ぶ子どもたちの健やかな活動にも関わりを持つ事が大切と考えます。厳しさの中にも褒めて育てる子育てに共感しました。

実践発表では、京都市で行っているPTAフェスティバルを取り上げ、5つの校種（幼稚園、小学校、中学校、高等学校、総合支援学校）の連携、そして会員一人一人が繋がっていくことと、尊重し合う事の大切さを再認識いたしました。また、様々なコミュニケーションのきっかけ作りの一つとして、地域とかかわり製作した壁新聞の実践報告がありました。

客席参加型パネルディスカッション

最後のパネルディスカッションでは、地域とかかわる事で、その事がいつしか子どもを通して私たちの子どもたちにかえってくるのだと改めて気付きました。環境や時代が違えども、子育ての基本に変わりはないと気付き、PTAとして、また、親としての在り方、地域の人としての在り方を会場の皆さんと考え、共有しました。

地域に住み、地域を、そして子どもたちを育てていくのはその地域に住む人であるのです。さあ、共に始めましょう！

第６分科会

人権教育

子どもたちの未来のために

～家庭と地域と社会で共に育もう～

パネルディスカッション

第6分科会は「子どもたちの未来のために」を研究主題に、京都市勧業館みやこめっせで開催されました。

鶏鉾保存会と京都市立洛央小学校児童『エンヤラヤー洛央』による「祇園囃子」の歓迎アトラクションで幕を開けた午前の部は、開会式に次いで金澤翔子（蘭鳳）氏による席上揮毫が行われました。集中力を研ぎ澄まして書き上げられた『飛翔』の力強い文字に、会場の参加者からは大きな拍手が沸き起こりました。

基調講演は、書家の金澤泰子（蘭鳳）氏をお招きしました。「天使の正体～金澤翔子と母がたどった軌跡～」と題して、出産後に愛娘の障害を知って絶望しながらも我が子の言葉に勇気を見出し、生きる希望を与えられながら二人で歩んできた。愛情溢れる温かな口調と、「翔子は他者への愛情が全ての原動力になっている」という言葉に、私たちも改めて「親子の絆」を再考する機会になったのではないかと思います。

午後の部は、来年度第61回大会開催地三重県の「みえ大会実行委員」の皆様による心のこもったアピールの後、京都市立花山中学校PTAの田中純子氏による「人と人をつなぐPTA活動を目指して」と、京都市立中学校PTA連絡協議会の田中耕一氏、京都市立洛東中学校PTAの渡辺昭雄氏による「携帯電話の危険性についての取り組み」が実践発表されました。どちらも、まず保護者同士が連携して理解を深め合い、学校とも足並みを揃えながら子どもと向き合い見守ろうとする熱い思いを原動力に、PTAの結束力と行動力が感じられる発表内容でした。

最後のパネルディスカッションでは、佛教大学教授の西岡正子氏をコーディネーターに、パネリストとして京都教育大学教授の桶谷守氏、奈良県上牧町立上牧小学校校長（全人教副理事長）の中村衛氏、京都市立久世中学校PTAの岡田典子氏、そして実践発表から引き続いて田中耕一氏をお迎えし、「子どもを共に育む京都市民憲章の実践」をテーマに討議いただきました。いじめや不登校などの現状から子どもたちを守るために、また問題を解決していくためには、私たち大人が何を考え、どのように行動しなければならないのか。それぞれの立場から、経験談や活動を基にした具体的な意見が相次ぎ、熱気溢れるパネルディスカッションとなりました。

分科会を終えて、人権教育は決して特別なものではなく、「身近で当たり前のこと」だということを強く感じました。

最後になりましたが、参加された皆様、運営に携わっていただいた実行委員・スタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。

第７分科会

環境教育

京都議定書の地、京都市における環境に対する豊かな感性の育成と実践

～市民ぐるみ・地域ぐるみの環境教育を進めるために～

祇園囃子と子どもたちの踊りのアトラクションで幕を開け、華道家辻井ミカ氏に基調講演「いけばなで自然と生命の大切さを学ぶ」～共有、共感、共生、共創～をご講演をいただきました。いけ花を通じて自然との関わり方、子どもたちへの関わり方、自然との関わりの中での命の大切さの学びをお教えいただきました。また会場で、嵯峨御流独自の花態である、「深山の景」、「沼沢の景」、「海浜の景」をご披露いただき、水の連続した流れから生まれる自然の融和美と風景が紹介され、私たちの生活自体が自然の一部であることをお示しいただきました。

実践発表では、先ず蜂ケ岡中学校に、あじさいを育て地域に広げる子どもたちを通じ、学校、地域、企業までも巻き込んだPTA活動の在り方を報告いただきました。つぎに、京都市PTA連絡協議会から、幼稚園から他校種（小学校・中学校・高校・総合支援学校）への発信として、毎月16日の取組についての話を報告いただきました。16日の「ノーテレビ、ノーゲームとちょっとのエコを」の実践は幼稚園から始まった活動で、学校種により活動の違いはありますが、京都市PTA連絡協議会の校種間での連携の一例として報告いただきました。

祇園囃子と子どもたちの踊り

最後に、パネルディスカッションでは全体の流れをおさらいし、パネラーとの討議はもとより、会場をも巻き込んだ参加体験型のディスカッションが実現しました。一日を通し、環境教育の在り方を考え感じていただけたと思います。

第８分科会

健康・安全

食は　いのち　なり

～実際に、出汁（だし）のうま味を感じる～

10日前に、会場が変更になったにも拘わらず、大きな混乱もなく幕が開きました。

精華町少年少女合唱団・城陽市少年少女合唱団のアトラクションの後、開会式が差なく終了し、京懐石料理「近又」のご主人の基調講演が始まりました。

講演は、家族の団欒の大切さ、生命をいただいた食べ物に感謝することの大切さ、季節のもの、その土地のものを食べるということの大切さ、日本人が古来より大切にし、そして、今失われつつある「食」を暖かいお言葉で、時には、笑いも交えながら、熱くお話ししていただきました。自らが調理してくださった昆布だけの出汁と、昆布に鰹節を加えた出汁が参加者に配布され、試飲することで「ひと手間かける大切さ」を体感させていただきました。

基調講演　鵜飼治二氏

その後、西城陽高校合唱部の素晴らしいステージの後、八幡市立美濃山小学校PTA、精華町立山田荘小学校PTAの食育の取組みの実践発表をしていただきました。

最後に、食育研究家の木下穂枝子先生をコーディネーターに、ルイ・パストゥール医学研究センターの藤田先生、京都府立医大学長の吉川先生、加茂小学校栄養教諭の籠先生、広島PTAの加藤氏をパネラーとして、これからの食のありかた、「早寝、早起き、朝ご飯」の大切さ、家族で囲む食卓の重要性等を専門的なことも交えて、熱い討論が行われました。

閉会式は、実行委員を中心に40名が登壇し、会場全員で日本PTAの唄を歌い、幕を閉じました。

「食は命なり」のテーマが、一貫して流れる、調和のある研究大会でした。

特別第１分科会

スポーツと教育「乗り越える」

～人生の課題について前向きに取り組むことをスポーツを通して学ぶ～

基調講演　大林素子氏

特別第一分科会報告

「スポーツと教育」をテーマにした、特別第一分科会では「のり越える」をキーワードに、元気あふれる内容となりました。

スポーツの分野における「のり越える」について、幼少からの本人の努力のほか、ご両親や指導者をはじめとした、周囲の大人との関係について、スポットを当てることを目指しました。

基調講演には、元バレーボール日本代表の大林素子氏を迎え、背が高いことがコンプレックスであったこと、お母さんの言葉により、それを克服していったことなどを語られましたが、冒頭では参加者と身長比べをされ、会場が一体感に包まれた講演となりました。

また、後半には数名の参加者が舞台に上がり、大林さんとのトークコーナーとなりました。子どもへの具体的な指導方法に始まり、大林さん自身の恋愛にまで話が及び、おおらかな人柄を感じることができました。さらには、参加者にサインボールをプレゼントしていただき、たいへん盛り上がったプログラムとなりました。

午後からは、元ソフトボール日本代表の田本博子氏（現中学校教諭）に、競技者として指導者として、そして教育者として見えてきたことについて実践発表をいただきました。

実践発表　田本博子氏

ユニフォーム姿でのパワフルなお話しに加え、さらには、シドニーオリンピックでの銀メダルをお持ちいただき、1400名の参加者、全員が実物のメダルを手に取り、首にかけ、そして写真を撮るという、貴重な体験ができました。

その後、パネルディスカッションでは田本氏を含め、指導者、保護者そしてスポーツドクターをメンバーとし、さまざまな角度から「のり越える」を検証しました。

とくに、医師からは、頑張る子どもたちを応援するとともに、何より将来のために、競技を休ませなければならないことがあることを、具体的で身近な症例とともに説明され、その責任が保護者や指導者である大人にあることを訴えられました。

子どもたちの「のり越える」を見守るとともに、参加した私たち大人に元気が与えられた分科会となりました。

パネルディスカッション

●基調講演
　～トップアスリートとして歩んできた、今だからこそわかること～
　講　師　　大林　素子（元女子バレーボール日本代表）
●コーディネーター
　杉浦　　健（近畿大学教職教育部教授）
●パネリスト
　田本　博子（シドニー五輪ソフトボール銀メダリスト）
　（京都市立下京中学校教諭）
　深栖　肇子（京都市立七条中学校ＰＴＡ会長）
　森原　　徹（京都府立医科大学大学院医学研究科医学博士）
　（運動器機能再生外科学（整形外科学教室）講師）
　冨川　芳人（社団法人日本ＰＴＡ全国協議会前副会長）
　（山口県ＰＴＡ連合会前会長）
●実践発表者
　田本　博子（シドニー五輪ソフトボール銀メダルスト）
　（京都市立下京中学校教諭）

特別第２分科会

東日本大震災から見えた学びの場を核とした地域の「絆」づくり

基調講演　松原耕二氏

特別第二分科会報告

特別第二分科会に遠路遙々お越しいただきましてありがとうございました。

この分科会では文部科学省との協力により「東日本大震災から見えた学びの場を核とした地域の絆づくり」をテーマに学び合いました。

基調講演やパネリストの紹介では、日頃からの地域と学校の絆づくりの大切さと、発災時の老若男女、立場をこえた助け合い、支え合いが如何に尊いものであったかを再確認することとなりました。

そして、地域と学校をつなぐ「蝶番」となったのがＰＴＡであることも分かりました。

反面、ＰＴＡ世代が日頃から地域のために活動することの難しさも課題となりました。

『……助けていただいたみなさんから物資だけではなく、元気や勇気、優しさをいただいたことに心から感謝しています。』作文披露に登壇した箱山輝之介君（岩手県大槌小学校６年）の一言一言からは、子どもでさえその絆を確かに感じ取り、感謝し、親や先生方、そして、地域のみなさんに恩返ししたいと考えていることが実感されました。

甚大な被害とそれが浮き彫りにしたＰＴＡの役割とＰＴＡ世代の課題を真摯に見つめ、語り継ぐ責任を感じた一日でした。

●基調講演
　講　師　松原　耕二（ＴＢＳテレビキャスター）

●キーノート講演
●コーディネーター
　山崎　　亮（京都造形芸術大学教授）
●パネリスト
　佐藤　淳一（仙台市教育センター主幹）
　宇部　陽子（岩手大学大学院生学生ボランティア副代表）
　藤原　弘義（平成24年度京都府ＰＴＡ協議会副会長）
●作文披露
　箱山　輝之介君（大槌町立大槌小学校６年生）

パネルディスカッション

全体会

「がんばろう日本！がんばろうＰＴＡ！」被災地からの声

この京都大会、全体会の最後には、東日本大震災の復興への思いを込めて、「がんばろう日本！がんばろうＰＴＡ！」と題し、京都の子どもたちと参加者全員で、「ふるさと」「翼をください」を合唱しました。

そして、被災地である福島県ＰＴＡ連合会会長から、被災地はまだまだ震災の爪あとが残っているが、みんな復興に向けてひたむきに頑張っている。また一方、原発の二次災害による住民の移転問題や風評被害に苦しんでいることなどが切実に語られました。

そして、なによりも、今の現状が日本の皆様に忘れられてしまうのでは、という不安が大きいことが報告され、まだまだ支援を続けて欲しいと訴えかけられました。

会場にいた参加者は、その切実な訴えに改めて支援する気持ちを強めたと思います。

被災地からの報告

被災地からのお礼パネル

次期開催地は三重

みえに集えばきっと見える…三重からの「和」

～はじまりの地で　語り育もう　子どもたちの未来～

平成25年８月23日（金）～８月24日（土）

第34回全国小・中学校ＰＴＡ広報紙コンクール入賞作品決定！

文部科学大臣賞受賞広報紙

《茶臼山プレス》鳥取県北栄町立北条小学校ＰＴＡ
《紫原》鹿児島県鹿児島市立紫原中学校ＰＴＡ

8月16日、日本ＰＴＡ会議室において、第34回全国小・中学校ＰＴＡ広報紙コンクールの最終審査が行われ、入賞作品が決定した。

審査対象は、平成23年度中に広報紙を2回以上発行したＰＴＡで、今年度の応募総数は5831校（小学校4052校、中学校1779校。

各地方協議会での第1次審査の後、日本ＰＴＡ全国協議会における第2次・第3次審査、そして最終審査を経て、ＰＴＡ広報紙の持つ目的・使命・記事・編集・レイアウト・見出し文章などの評価が総合的に優れているとして小学校21校、中学校21校の計42校の広報紙が受賞の栄誉に輝いた。

入賞校の表彰式は、11月22日の日本ＰＴＡ全国協議会年次表彰式にて行われる。

審査風景

【小学校の部】
防災のあり方見直す契機に

日本教育新聞社編集局
局長　矢吹正徳

総数4052校が応募し、最終審査の結果、文部科学大臣賞から佳作まで21校の作品の入賞が決まりました。最終審査に至る過程では、甲乙付けがたい作品の出来栄えから選に残すかどうか苦渋の選択を迫られることも多々ありましたが、総合的に評価した結果、他のＰＴＡの範になるような広報紙（誌）の作品群が揃ったと思います。また、審査を通じ、日頃の各ＰＴＡ活動の一端に接する機会を得ることができたことを感謝します。

今回対象となった発行期間が東日本大震災後ということもあり、「3・11」をめぐり当日何をしていましたかなど「その日」を語るもの、避難経路や連絡の方法など親子で考える防災、被災地訪問記、放射能を考えるなどのような企画が目立ち、例年の紙面作りとは顕著な違いが見られました。

その啓発性や問題提起する力は本来、ＰＴＡ広報紙（誌）が持つ良さが引き出されていたといえるでしょう。今後も、身近な防災を見直す契機にしたいと思います。

全体としては、これはこれまでの特徴でもありますが、学校便りと不分明な傾向はあまり変化がありませんでした。入選した各広報紙（誌）は、その意味では、ＰＴＡ活動と学校行事的な情報とのバランスなどが良く取れている作品が多くなっています。

その他の企画では、携帯電話やインターネットなどを扱ったもの、お小遣いや親子のコミュニケーション、家庭学習、子どもの遊び、食育、放課後の過ごし方、習いごと事情、お手伝いなどは定番化しています。

中には、「脱ゆとり教育」や「中1ギャップ」「外国語活動」「発達障害」など今日的なテーマに挑戦している広報紙（誌）もありました。

次回も、どんな作品に出合えるか楽しみにしています。

【中学校の部】
広報紙コンクール講評

教育家庭新聞社
社長　菊池清広

今年も全国6000近くのコンクール応募校から、広報委員の皆さんの思いのこもった広報紙が寄せられました。まずは関係者の方々の発行への努力に対して、敬意と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

ところで広報委員は、各種のＰＴＡ役員・委員の中でも希望者の少ない、人気のない委員と言われています。さらには「広報紙不要論」さえ聞かれます…なぜでしょう。最近の情報手段、各種メディアの発達は本当に驚かされますが、だから不要なのでしょうか。

ＰＴＡ広報紙は、会員のために必要な情報を、会員が自ら集め、会員に発信する（知らせる）ことができるという、他のメディアが真似できない貴重なコミュニティ紙です。この強みをＰＴＡ活動の活性化に活かさないのは〝モッタイナイ〟です。だからコンクール審査基準には「ＰＴＡ活動の実態を掲載しているか」、そして「読みやすさ、見やすさ」の工夫がされているかが最重視されているわけです。学校行事の記録ばかりが目につく内容ではがっかりですね。

また課題を共有するための特集は、ＰＴＡ広報紙の目玉です。今回は大方の予想通りですが、3・11にちなんだ「震災・防災」や「地域安全」に関する特集テーマが目立ちました。

単純に地域の防災情報やグッズ紹介だけが多い中で、一人ひとりの会員自身の課題に引きつけて考えさせる紙面、安全教育の原点まで掘り下げた紙面などが好印象でした。具体的には、会員アンケートから各家庭の取り組みを教え合い考えさせるもの、学校との連絡の在り方やできる協力体制の確認、生徒達の感想文から心のケアを提起するなど、切り口にＰＴＡらしさを感じます。他にはボランティア活動、親子のコミュニケーション、食育など多く取り上げられていました。

ＰＴＡだからこそできるコミュニティ紙づくりを工夫すれば、「不要論」は不要になるはずです。

おめでとう！　広報紙コンクール入賞校

賞	小学校ＰＴＡの部	中学校ＰＴＡの部
文部科学大臣賞	≪茶臼山プレス≫鳥取県北栄町立北条小学校ＰＴＡ	≪紫原≫鹿児島県鹿児島市立紫原中学校ＰＴＡ
日本ＰＴＡ全国協議会会長賞	≪こんにちは。≫北海道帯広市立啓北小学校ＰＴＡ	≪はるひの≫川崎市立はるひ野小中学校ＰＴＡ
	≪やまた≫横浜市立山田小学校ＰＴＡ	≪やまむろ≫富山県富山市立山室中学校ＰＴＡ
	≪たきの音≫福岡県福智町立上野小学校ＰＴＡ	≪こうほう国府≫山口県防府市立国府中学校ＰＴＡ
日本教育新聞社長賞	≪さくら木≫神奈川県秦野市立南小学校ＰＴＡ	≪翔陽≫北海道帯広市立翔陽中学校ＰＴＡ
	≪矢流≫富山県小矢部市立石動小学校ＰＴＡ	≪波紋≫茨城県ひたちなか市立那珂湊中学校ＰＴＡ
	≪ゆずりは≫宮崎県都城市立高城小学校ＰＴＡ	≪ピロティ≫宮崎県宮崎市立赤江東中学校ＰＴＡ
教育家庭新聞社社長賞	≪ひとこと≫青森県八戸市立青潮小学校父母と教師の会	≪五中ＰＴＡ新聞≫群馬県前橋市立第五中学校ＰＴＡ
	≪ときわ≫さいたま市立常盤小学校ＰＴＡ	≪心の城≫富山県小矢部市立石動中学校ＰＴＡ
企画賞	≪かもいけ≫鹿児島県鹿児島市立鴨池小学校ＰＴＡ	≪和泉中ＰＴＡ≫東京都杉並区立和泉中学校ＰＴＡ
写真賞	≪むらき≫富山県魚津市立村木小学校育成会	≪伊奈波≫岐阜県岐阜市立伊奈波中学校ＰＴＡ
レイアウト賞	≪いちのみや≫岡山県津山市立一宮小学校ＰＴＡ	≪さいき城南≫大分県佐伯市立佐伯城南中学校ＰＴＡ
佳作	≪まつばら≫山形県酒田市立松原小学校ＰＴＡ	≪東風≫岩手県一関市立一関東中学校ＰＴＡ
	≪なかしまね≫東京都足立区立中島根小学校ＰＴＡ	≪かしわ≫仙台市立富沢中学校父母教師会
	≪ひびき≫千葉県長柄町立長柄小学校ＰＴＡ	≪山河≫山形県酒田市立第三中学校ＰＴＡ
	≪ＫＩＤＡＳＨＯ　ＮＥＷＳ≫福井県福井市木田小学校ＰＴＡ	≪陽光≫神奈川県秦野市立西中学校ＰＴＡ
	≪おくら山っ子≫京都府宇治市立御蔵山小学校育友会	≪山なみ≫長野県長野市立広徳中学校ＰＴＡ
	≪たかす≫北九州市立高須小学校父母教師会	≪森≫岐阜県岐阜市立長森中学校ＰＴＡ
	≪あおば≫福岡市立青葉小学校父母教師会	≪かけはし≫長崎県南島原市立口之津中学校育友会
	≪財風≫宮崎県日向市立財光寺小学校ＰＴＡ	≪あもりがわ≫鹿児島県霧島市立日当山中学校ＰＴＡ
	≪ひろき≫鹿児島県鹿児島市立広木小学校ＰＴＡ	≪ＰＴＡ神森中≫沖縄県浦添市立神森中学校ＰＴＡ

県Ｐ自慢　沖縄県Ｐ　シリーズ69

「子どもたちに豊かな表現力を」

沖縄県ＰＴＡ連合会会長　大城　宗高

私ども、沖縄県ＰＴＡ連合会には、63年の長きに亘る特色ある取り組みがあります。それが「沖縄県童話・お話・意見発表大会」です。小学校低学年（1～3年）が童話、小学校高学年（4～6年）がお話、中学生が意見発表大会に挑戦するという仕組みで、男女別にそれぞれ16名ずつで最優秀賞（1名）、優秀賞（2名）を競い合うというものであります。

さて、この行事の発端を遡ってみたいと思いますが、大戦直後の沖縄の子どもたちは、家庭や地域で方言ばかり使って喜らしていたので、標準語がうまく使えず、当然のごとく、人前で話すことが苦手でありました。そこで、沖縄の子どもたちの現状を憂えた、当時の沖縄教職員会長の屋良朝苗先生（日本復帰当時の沖縄県知事）を頂点とする沖縄教職員会の指導の下で、学校の先生方が一丸となって、沖縄の子どもたちに「語彙力をつけること」「発表力をつけること」「表現力を高めること」等をねらいとして出発したものが、いつごろから今のようなＰＴＡ行事になったかといいますが、先輩方の話によれば、およそ30年ぐらい前からだと聞いています。

童話・お話大会低学年女子

童話・お話大会高学年男子

さて、本来学校行事として出発したものが、いつごろから今のようなＰＴＡ行事になったかといいますが、もちろんＰＴＡ役員の方から、「私たちは褒美を出すだけで行事の主催者にはなれないのか？」との意見が出されて、同席された校長先生からは「ＰＴＡ行事にしてもらい、Ｔ側は指導と審査の責任を果たしてもらいたい」との助言であったと聞いています。そして、このスタイルが隣校へ、また隣校へ、という風に次々に広まり支持されて、現在では全県的なものになっていると思います。もちろんＰＴＡ行事ですから、ＰとＴが、どちらも主催者であることに間違いはありません。双方がその特性を活かして役割分担し合うことは、極めて大切なことであります。

また、60余年の歴史と伝統を持つ沖縄県独自の素晴らしい行事だと自負しているところであります。

文部科学省

平成24年度全国学力・学習状況調査の結果公表について

文部科学省では、本年4月に実施した平成24年度全国学力・学習状況調査の結果について、8月8日（水）に公表しました。

調査日：平成24年4月17日（火）

調査方式：抽出調査（抽出率約30％）及び希望利用方式

調査対象：小学校第6学年（約26万人）、中学校第3学年（約44万人）

※（　）内は抽出調査の対象数

対象教科：国語、算数・数学に加え、初めて理科を実施

※児童生徒及び学校に対し、生活習慣や学習環境等に関する調査も実施

平成24年度調査では初めて理科を実施し、「観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、説明すること」などに課題があることが分かりました。また、理科の勉強が好きな割合は高い一方、「大切」「将来役に立つ」と思う割合は低く、特に、中学生になると、理科に対する関心・意欲や授業の理解度が大きく低下することが明らかになりました。

さらに、これらの理科の関心・意欲・態度に関する質問に肯定的に回答した小中学生や、理科の観察・実験について「予想を立てて計画している」「結果を考察している」小中学生の方が、理科の平均正答率が高い傾向が見られることなども分かりました。なお、このような傾向は中学校の方が小学校よりも強く見られました。

調査結果については、国、教育委員会、学校において、教育施策や教育指導の改善・充実に役立てていきます。

平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）について

平成25年度全国学力・学習状況調査については、平成24年1月に取りまとめられた『きめ細かい調査』の基本的な枠組み」（全国的な学力調査に関する専門家会議）を踏まえ、平成24年7月に文部科学省において「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の設計」を公表したところです。以下のとおり調査・分析を実施することで、教育施策の成果と課題に関する検証改善、児童生徒に対する教育指導の改善等をきめ細かく行うことを予定しています。

【本体調査】

〇調査日：平成25年4月24日（水）

〇調査対象：小学校第6学年、中学校第3学年の全児童生徒

〇対象教科・国語、算数・数学（児童生徒・学校に対する質問紙調査をあわせて実施。児童生徒に対する調査は複数冊子化。）

【追加調査】

①経年変化分析のための調査（抽出）

②保護者アンケート調査（抽出）

③教育委員会に対する調査（全数）

【専門家による追加分析】

調査結果を活用し、専門家による追加分析を実施

・経済的な面も含めた家庭状況等と学力等の分析

・学校における指導方法と学力等の分析など

教育・文化週間ロゴマーク（中央のキャラクターは生涯学習のイメージキャラクター「マナビィ」）

11月1日から7日は「教育・文化週間」です

「教育・文化週間」は、我が国の教育・文化に関して、広く国民の皆様に理解と関心を深めて頂くとともに、その充実振興を図るため、昭和34年に設けられたもので、今年で54回目を迎えます。

11月1日（木）から11月7日（水）までの期間中は、全国各地で教育・文化の魅力を伝える様々な行事が催されます。例えば、各地の美術館や博物館、大学などの文化施設・研究施設では、特別展や施設の無料公開等が催されるほか、各都道府県や市町村でも、教育・文化をテーマとした行事が開催される予定です。

皆様も、是非この機会に、様々な行事を通じて、教育や文化の魅力に触れてみませんか。詳しくは、教育・文化週間ホームページ（http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kyoiku-bunka/）をご覧ください。（生涯学習政策局政策課）

「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」について

平成22年6月3日、中央教育審議会に「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の在り方について」諮問され、本年8月28日、本答申が取りまとめられた。この答申のポイントは、「学び続ける教員像の確立」にある。変化の激しい時代の中で、教員一人一人が探究心を持って学び続け資質の向上を図ろうとする取組を、教職生活全体にわたって支援する体制を構築することが大きな目的である。

そのための方法として、「修士レベル化」ということを中心に据えつつ、養成から採用、研修、管理職の段階までを体系的なシステムとして構築する必要があるという考え方を基本としている。

本答申は、「現状と課題」「改革の方向性」「当面の改善方策」の3章構成となっている。

「現状と課題」においては、審議の背景として、①21世紀を生き抜くための力を子どもたちに育むために、新たな学びを支える教員の育成が必要であること、②学校の小規模化や大量退職等により、先輩から後輩への知識技能の継承が困難となり、複雑化・高度化した課題に、初任段階の教員が課題を抱えるケースがあること、③社会の急速な進展の中で、教員の知識技能も絶えざる刷新が必要となっていることの3点が挙げられている。

「改革の方向性」では、教員免許状の将来の改革の方向性が示されている。現行制度では、大学卒業で一種免許状（標準的な免許状）を取得できるが、新しい免許制度では、大学院修了により標準的な免許状となる「一般免許状（仮称）」を取得することとし、併せて、大学卒業でも取得できる「基礎免許状（仮称）」も創設することとしている。

しかし、この免許制度の改革を実現するために、まずは、大学院の質と量の充実、現職教員の研修等における教育委員会と大学との連携・協働体制の構築等が必要不可欠であるため、答申では「当面の改善方策」として、関係者の取り組むべき課題を提言するとともに、今後詳細な制度設計の検討を進めるなど、ステップを踏みながら段階的に取組を推進していく必要があるとされている。

なお、本答申の詳細やこれまでの審議の経過等については、次の文部科学省HPを参照していただきたい。（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/toushin.htm）

国立劇場

十二月文楽鑑賞教室

国立劇場では、初めての方にも人形浄瑠璃文楽を楽しくご覧いただける「鑑賞教室」を開催しています。文楽技芸員による解説と、文楽を代表する名場面を上演する、たいへんお勧めの公演です。ぜひ一度国立劇場でご覧下さい。

〇演目「靭猿」「解説　文楽の魅力」「恋女房染分手綱」

〇日程　12月4日～16日／11時・2時（7・9・14・16は11時のみ）

〇料金　一般3800円／学生1300円

〇団体観劇（10名以上）のお問合せは営業係03-3265-6751

〇一般発売は11月7日(水)より開始

〇国立劇場ホームページ：http://www.ntj.jac.go.jp/kokuritsu.html

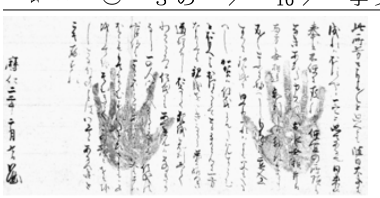
京都国立博物館

特別展覧会「宸翰（しんかん）　天皇の書―御手（みて）が織りなす至高の美―」

かつて、わが国には「古筆」といわれる名人たちの書を集め、それらを鑑賞する文化がありました。つまり、書は読むものであると同時に、筆の運び方や紙の使い方といった造形的な美しさなどを見て感じるものでもあるのです。

宸翰とは天皇自筆の書のことで、プライベートなものから国家の安泰を願うものまで実にバラエティー豊かです。いずれもが帝王としての気品と風格を備えており、まさに書の王者であるといっても過言ではありません。

本展覧会では、国宝17件、重要文化財66件を含む奈良から昭和時代までの宸翰約140件を一堂に展示します。書がもつすばらしさを再発見していただければ幸いです（平成24年10月13日～11月25日）。



国宝　後鳥羽天皇宸翰　御手印置文　水無瀬神宮蔵

平成24年度公立学校施設の耐震改修状況調査等について

文部科学省では耐震改修状況調査と、非構造部材の耐震点検及び耐震対策の状況調査の結果を公表しました。

公立小中学校の耐震化率は84・8％となる一方、耐震性がない建物も未だ1万8508棟残っていることが明らかになりました。また、天井材等の非構造部材については、耐震点検の実施率は66・0％、全学校における耐震対策の実施率は32・0％と、耐震対策の取組が遅れている状況が明らかになりました（数字は平成24年4月1日現在。なお、詳細はHPに掲載中）。

東日本大震災では学校施設が子どもたちの命を守っただけではなく、多くの施設が地域住民の応急避難場所として利用され地域の防災拠点となったことから、その安全性の確保がきわめて重要であることが強く認識されました。また、多くの学校において天井材の落下などの被害が発生し、一部では人的被害が生じるなど、改めて非構造部材の耐震対策の重要性が明らかになりました。

文部科学省では、昨年5月に平成27年度までのできるだけ早い時期に公立学校施設の耐震化を完了させるという目標を明確化しました。また、本年8月には、より一層積極的な取組が必要と考えられる137市町村の首長に対し、文部科学大臣から耐震化の加速について、初めて要請を行ったところであり、今後は、必要に応じ職員が直接訪問して働きかけを行います。

引き続き、非構造部材の耐震対策も含め、財政支援などの必要な施策を積極的に講じていく所存です。

東日本大震災による被害
（体育館の天井材の落下）

東日本大震災による被害

九州国立博物館

文化交流展トピック展示　茶の湯を楽しむⅤ―芦屋釜と館蔵茶道具―

九州国立博物館で行われる秋恒例の茶道具展。今年は、地元九州の豊かな風土が生んだ芦屋釜の魅力に迫ります。芦屋釜は、優美な文様やふっくらとした形姿、そして鯰肌（なまずはだ）と称される鋳肌の美しさを特徴とする茶釜です。室町時代には「釜は芦屋」とまで言われ、都の貴族や武士たちに愛された芦屋釜。今回は、様々な茶道具の名品もあわせてご紹介します。茶の湯の世界の広がりと奥深さを存分にお楽しみ下さい。

平成24年9月12日（水）～12月9日（日）

九州国立博物館4階文化交流展示室関連第9室

URL：http://www.kyuhaku.jp

作品名：重要文化財　楓流水鶏図真形釜
時代・世紀：室町時代・15世紀
所蔵：九州国立博物館

東京国立近代美術館工芸館

秋の企画展「現代の座標　工芸をめぐる11の思考」

現代という時代を映す工芸を紹介するシリーズ展第3弾は、広く国内外にフィールドをもつ11人の作家に注目します。

池田巖、田中信行（漆工）、小田橋昌代（ガラス）、栗木達介、黒田泰蔵、樂吉左衞門、八木明（陶磁）、関島寿子（編組）、武山直樹（七宝）、畠山耕治（金工）、森口邦彦（染色）。素材や表現は異なりながら、いずれも日本工芸に新たな座標を構築するものとして評価される彼らの作品約100点が一同に会する展覧会。

11/3（祝）・12/1（土）は無料観覧日です！

■会期＝12／2（日）まで

■観覧料＝一般500円、誕生日当日の方無料ほか

■休館日やイベントは、ハローダイヤル03－5777－8600または http://www.momat.go.jp

武山直樹
《はくたい》2012年
個人蔵

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所創立60周年記念　平成24年度平城宮跡資料館秋期特別展「地下の正倉院展・平城宮第一次大極殿院のすべて」

奈良時代前半の平城宮には、国家的儀式空間―第一次大極殿院がありました。奈良文化財研究所では1959年以来、第一次大極殿院地区を継続して調査し、全貌を明らかにしました。

本展では、当地区で出土した瓦や建築部材、多彩な内容の木簡、今はなき建物を彷彿とさせる遺構の写真や図面など、50年に及ぶ発掘調査成果をギュッと凝縮してお見せいたします。

■会期＝10／20（土）～12／2（日）

■問い合わせ＝0742―30―6753

第一次大極殿に葺かれた鬼瓦

各ブロック大会のお知らせ

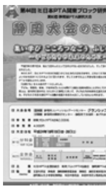
北海道ブロック　宗谷・稚内大会

■10月6・7日■
＊大会主題＊
「子育ては、人づくり・まちづくり」
＊会場＊
稚内市総合文化センター、稚内市役所、稚内南中学校、稚内中央小学校、稚内東小学校、潮見が丘小学校、潮見が丘中学校
＊記念講演＊
演題「子どものために手をつなぐ～保護者と学校のいい関係づくり」
講師　小野田　正利氏（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

東北ブロック　酒田・飽海大会

■9月8・9日■
＊大会主題＊
築こう笑顔溢れる未来を　育もう公益の心を　つなごう家庭・学校・地域を
＊会場＊
酒田市民会館、酒田市総合文化センター、遊佐町生涯学習センター他
＊記念講演＊
演題「グローバルな時代だから日本語を！」
講師　石川　牧子氏（日テレ学院　学院長）

関東ブロック　静岡大会



■10月19・20日■
＊大会テーマ＊
「心を繋げる」
集い学び　こころつなごう　ふじのくに　～子どもたちの未来のために～
＊会場＊
静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ大ホール海、静岡県地震防災センター、静岡商工会議所、あざれあ・グランシップ
＊記念講演＊
演題「世界からのメッセージ～命と愛の絆～」
講師　渡部　陽一氏（ジャーナリスト）

東海北陸ブロック　富山大会

■10月12・13日■
＊大会主題＊
見直そう親子のふれあい　いいがに話さんまいけ　ＡＮＫＵで
＊会場＊　魚津テクノスポーツドーム（ありそドーム）他、6会場
＊記念講演＊
演題「出会いの人生から学んだこと」
講師　菊池　幸夫氏（弁護士）

中国ブロック　山口県しものせき大会

■11月18日■
＊大会テーマ＊
帰ろう家へ　～笑いがたえない明るい家庭～　熱い　おやじ・あったか　かあちゃん
＊会場＊
海峡メッセ下関
＊記念講演＊
演題「キャスターとして、親として」
講師　生島　ヒロシ氏（フリーアナウンサー）

四国ブロック　徳島大会

■11月11日■
＊大会スローガン＊
親の笑顔が子どもの笑顔をつくる！～「未来（あす）」の子どもたちの輝く笑顔のために～
＊会場＊
徳島県教育会館大ホール
＊記念講演＊
演題「愛されて子どもは育つ」トーク＆コンサート
講師　南　修治氏（シンガーソングライター）

九州ブロック　佐賀大会

■10月27・28日■
＊大会スローガン＊
語り合い　認め合い　育てあい　〝愛〟ことば「子育ていちばん！」～未来を創る子どもたちへ　今　私たちにできること～
＊会場＊　佐賀市文化会館、唐津市文化体育館、唐津市民会館他、10会場
＊記念講演＊
演題（仮）「輝きながら生きていくために～奇跡のいのちにありがとう～」
講師　草場　一壽氏（いのちのまつりプロジェクト地球が教室チーム）

「あるＰＴＡ会長の日記から」

学校、家庭、地域、三位一体

～子どもの健全な育成～

ＰＴＡ活動の意図

私がＰＴＡの活動に携わったのは15年前の事でした。当時は何も分からずにいわれるがままに、親父の会に入会してくださいと言われて入りました。この学校ではＰＴＡ活動は非常に活発でした。様々な活動を役員、先生、保護者、親父の会、ＯＢのメンバーで行っておりました。この中で私が感じたのは活動中、先生、保護者、ＯＢの方々と話ができ多くの仲間ができた事、また学校の様子を常に学校にいるかの様に鮮明に把握する事ができた事でした。その後会長を命ぜられ考えた事は、ＰＴＡ活動は楽しくなければ続かない、またあくまでも子どものサポート役であり前面にでるものではないと言う観念からスタートしました。子どもの健全な育成を目指す為には、学校、家庭、地域が三位一体となり子どもを支えていかなければならないと言う精神のもと自分なりに目標を立てました。

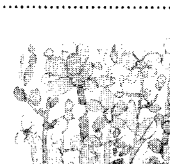
学校に於いては、保護者の声を聞き学校と折衝するパイプ役になる事、子どもたちと常にふれあい学校の様子を聞く事。

家庭に於いては、家庭教育が非常に大事であると言う事を保護者に認識してもらい実行する事、子どもは日々学び成長しているが、親も子どもの動向を見てどう育てるかを考えてもらう事。

地域に於いては、通学路のパトロール、登下校の付き添いの強化をする事、地域の方に開かれた学校であると言う認識をしていただき、学校の行事、イベント等に積極的に参加してもらい、子どもたちとふれあう時間を作る事、町内会の行事、祭り等には親子でどんどん参加してもらい、学校の役員も進んでお手伝いをして町会の方々と懇親を深める事。

この目標に向かい先生、役員、ＰＴＡ会員が一体となり活動した結果、大変大きな成果を得る事ができました。私が一番望むのは、保護者に学校にどんどん来てもらい、学校の事、子どもの学校での様子などを見て親として学校に望む事を考えて欲しいと言う事です。この様な積み重ねが、現在起こりうる「いじめ」等の発生を防ぐ要因になると考えます。今後も、子どもたちの笑顔が見られる様にＰＴＡ活動を続けて行きたいと思います。

Column
学校の窓から



シリーズ㊼

「自ら学び考え行動する、人間性豊かな生徒の育成」

『本校の概要』

本校は、東急田園都市線「駒沢大学駅」北側の、緑の多い住宅街に囲まれ、町並みも広々としていて、清潔な印象を受ける。校内には「タンチ山」という武蔵野の面影の残る雑木林があり、欅などの大きな樹木がそびえている。一方、学区の東方には、三軒茶屋の繁華な町があり、商業地区の活気も感じられる。

このような環境の中、生徒は明るく元気に学校生活を送っている。1年生4学級、2年生3学級、3年生3学級の10学級に「聞こえの学級」があり、全校生徒３４４名、教職員31名である。

保護者や地域は学校の教育活動にたいへん協力的で、本校にたくさんの期待を寄せてくれている。

『教育目標』

人権尊重の教育を基本とし、適切な判断や思いやりと規範意識をもった生徒の成長を願い、次の基本目標を定める。「自ら学び考え行動する、人間性豊かな生徒の育成」

『特色ある教育活動』

その1　数学・英語・理科で少人数指導を実施している。数学と英語では習熟度別に分け、生徒の質問や発言の機会・回数が増えたり、自分の学力にあった指導が受けられてよいという意見が寄せられたりして、好評である。

その2　放課後補習授業を週3日2時間実施している。数学、理科、英語の3教科で、登録制をとっている。

その3　英検教室を、毎週土曜日に行っている。5級～準2級まで4つのクラスを編成し、登録制をとっている。昨年度の合格者は、準2級5名、3級47名、4級52名、5級30名である。

その4　障害理解授業を行い、障害のある方のお話を聞いたり、体験をしたりして、障害に対する理解を深めている。また、難聴学級設置校のメリットをいかし、通常学級との交流も進めている。

その5　地域防災訓練を、毎年3月上旬の土曜日に行っている。中学生が全員参加し、町会や地域の方と合同で、けがの応急処置や救命講習、消防の放水などを実施している。

その6　複数担任制を行い、朝や帰りの学活、給食、掃除はもちろん、道徳や学級活動、教科「日本語」の授業など、教員が複数で対応している。

その7　ことばを大切にする活動を行っている。具体的には、朝読書、あいさつ運動、百人一首大会、書き初め展などを体系化し、計画的に実施している。

その8　『世田谷9年教育』として、「駒の学び舎」（駒沢中学校、駒沢小学校、三軒茶屋小学校、弦巻小学校）が連携し、義務教育9年間に責任をもったさまざまな教育活動を展開している。中でも、駒の学び舎全体が区教育委員会から「教育の情報化」についての研究委託を受け、ＩＣＴ機器やデジタル教科書などを活用した授業の在り方について、小学校と連携しながら研究を進めている。

第34回全国小・中学校ＰＴＡ広報紙コンクール

～好感もてる広報紙をめざして～

優秀広報紙集発刊

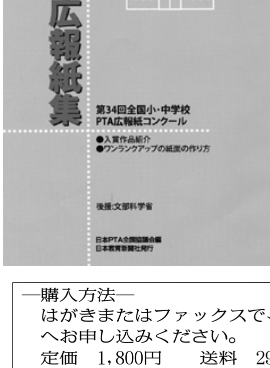
第34回全国小中学校ＰＴＡ広報紙コンクールの優秀作品を紹介した広報紙集が完成しました。

日ごろのＰＴＡ活動を反映したすばらしい作品の数々を紹介されています。

全国から５８３１校の応募があり、その中から各地方協議会での第1次審査を経た５７６校が日本ＰＴＡに推薦されました。さらに日本ＰＴＡでの第2次、第3次、最終審査を経たて小学校21校、中学校21校、計42校の作品がこの「優秀広報紙」に掲載されています。

各受賞作品の審査総評や「ワンラックアップの紙面の作り方」など、伝達情報の媒体としてのみでなく連携の絆としての役割を担う広報紙作りに欠かせない実践的な手引きとなっています。

是非、学校と家庭、地域を結ぶ機関紙作りにお役立てください。



―購入方法―
はがきまたはファックスで、住所、氏名、希望部数を明記の上、下記へお申し込みください。
定価　1,800円　　送料　290円（いずれも税込み）
社団法人日本ＰＴＡ全国協議会
〒107―0052　東京都港区赤坂７―５―38
ＴＥＬ０３―５５４５―７１５１　ＦＡＸ０３―５５４５―７１５２
（支払いは同封の振替用紙でお願いします）

そよ風通信

今号は、第60回日本ＰＴＡ全国研究大会京都大会の報告を特集として掲載しました。全国各地からお集まりいただいたＰＴＡ会員とともに、熱心な研究・活動発表が行われました。

大切な子どもたちのために、いつでも心の手をさしのべられるような環境づくりを願うばかりです。

その他、広報紙コンクール入賞校、文部科学省、各県Ｐからの取組み、ＰＴＡ会長、現役校長先生の思いも綴られています。今後の活動のご参考にご利用ください。

広報委員一同、これからも読みやすい紙面作りを心がけて行きたいと思います。